2017.7.4

博物館 Dictionary No.200

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

平成知新館3F-2（考古）に展示されている銅鐸について勉強してみよう。

袈裟襷文と流水文
―銅鐸の二つの文様―

銅鐸は日本の弥生時代を代表する青銅器です。農耕に関わる祭りのカネとして用いられたと考えられています。今回はその文様に注意して見てみましょう。

銅鐸には何種類かの文様がありますがここでは大部分を占める「袈裟襷文」と「流水文」の二種類を見てみましょう。この二つが銅鐸文様構成の基本といえます。

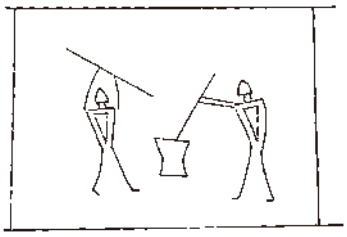
1　袈裟襷文銅鐸は「けさだすきもんどうたく」と読みますが、ずいぶん画数の多い難しい漢字をつかっています。ワープロ・パソコンのない時代には書くのに手が痛くなるほどでした。その文字はお寺のお坊さんが正装した際に身に着ける「袈裟」の文様から来ているのです。田の字のような格子状の文様が頭に浮かびますか？その文様から銅鐸の文様の名前が付けられたのです。「格子文」だったら書く手は痛くないのですが、なぜか画数の多い文字が選ばれました。今となっては「袈裟襷文」と聞くと銅鐸の文様が思い浮かぶのでこれでよかったのかもしれません。

図１　袈裟襷文銅鐸
和歌山市弘西橘谷出土　京都国立博物館蔵

縦方向と水平方向の帯によって銅鐸の身の部分が区画されます。基本は四区画（田の字）か六区画（用の字に下一本）になっています。呼び方は「四区袈裟襷文」、「六区袈裟襷文」となるわけです。ふつうの銅鐸ではこの区画の内部にはなにも文様を入れないのですが、たまに絵画や幾何学的な文様を入れる場合があります。

写真の銅鐸（図１）は和歌山市の橘谷で出土したもので、身に六個のマスがあるのでこれが六区袈裟襷文銅鐸です。区画のなかには文様や絵はありません。これが普通です。

国宝に指定されている伝香川県出土の銅鐸には鹿狩りの様子や高床倉庫・水鳥やスッポンなどが表現されています。このような銅鐸の絵画でとくに重要なのは「画面」の概念が生まれたところです。四角の枠の中に「絵画」をバランスよく納めた点が特に面白いのです。漫画にコマがあるようにこの銅鐸絵画は間違いなく枠線を意識してそのなかに絵画を構成しようとしたことが見て取れます。しかしながら銅鐸の絵画にはマンガのような一連の物語が表されてはいないようです。袈裟襷文の銅鐸は全体の八割ほどを占めていますので、銅鐸と言えばほぼこの文様です。



「脱穀の作業をする二人の人物図」
伝香川県出土六区袈裟襷文銅鐸の一部

2　流水文銅鐸はおもに身の部分に流れる水のような文様をもっています。これは複数の平行する線の束が反転を繰り返しながら銅鐸の表面に描かれたものです。流れる水を表していますか？と聞かれると、たぶん違うと思いますと答えます。

このような流水文は近畿地方の弥生時代中期の土器、おもに壺の表面に見られるものです（図2）。粘土でつくられた生乾きの壺の表面に櫛状の工具で水平基調の文様を描くことが基本なのですが、水平だけでは面白くないので櫛先をくるっと反転させて戻っていくことを繰り返すと水が流れたような文様ができます。このような土器の流水文を銅鐸に応用したのが流水文銅鐸となるわけです。弥生時代に江戸時代の琳派のような流水文があったとは面白いことです。

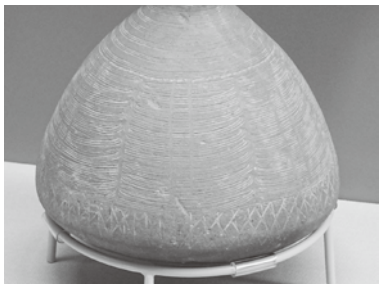


図２　弥生土器
大阪府柏原市船橋遺跡出土
京都国立博物館蔵（部分）

図３　重要美術品　流水文銅鐸　京都府与謝郡与謝野町
明石須代神社境内出土　京都国立博物館蔵

写真の銅鐸（図3）は京都府北部、与謝野町の明石というところで出土したもので、流水文銅鐸の典型といえるものです。

流水文をもつものは銅鐸全体の二割ほどです。このほかには水平基調の「横帯文銅鐸」もありますがごく少ないものです。銅鐸にはこのような大きな文様構成のほか、三角形をつらねた鋸歯文や渦巻を連続させた連続渦文などの幾何学的な文様が施されます。

（考古室　宮川禎一）

印刷・富士印刷社